

## 高機能自閉症と思われる事例への援助（２）

### — 保育園卒園後の状況 —

服 部 次 郎

**要 旨** 近年特別支援教育の対象として注目を集めることが多くなってきた「広汎性発達障害」であるが、本論文ではそのような障害のある児童が保育園を卒園した後、どのように小学校で生活をしているかについて論じた。この児童の保育園における成長については、すでに前論文（高機能自閉症と思われる事例への援助—保育園におけるTEACCHの活用—）において報告したが、小学校という新しい環境の中でこれまでの成果が活かされていくかどうかに関心を持たれた。小学校における対応によっては、これまでの成果がうまく活かされず、児童が小学校で不適応行動をみせ、いわゆる「小1プロブレム」という現象につながる場合もある。本事例においては保育園での指導が小学校にも受け継がれ、活かされて、本児の成長につながっていった。

#### abstract

“Pervasive developmental disorder (PDD)” is a special education target attracting increasing attention. The author discusses how a PDD child is leading a successful primary school life after completing day-care center. The concern was whether the good result at day-care center could be applied to a new primary-school environment. Some primary schools fail to take over the success at day-care center, driving pupils to maladaptive behaviors. The author treats a successful case of PDD child showing sound growth at primary school.

#### はじめに

「広汎性発達障害」（高機能自閉症〔アスペルガー症候群〕も含む）という医学的診断を受けた事例R君の小学校における状況を紹介する。R君については、保育園において近年注目されているTEACCHという治療教育の考え方に沿って保育がなされてきた。

TEACCHとは、“Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped CHildren”の略で、「自閉症およびそれに関連するコミュニケーションに障害をもつ子どもの治療と教育」という意味である。

このプログラムにおいては、自閉症の人たちに共通に見られる「障害特性」（例えば言葉で言われると混乱しやすいが、視覚的・具体的にいうと分かりやすい）や、一人ひとりの「機能水準（発達水準）」と「個性」を知ること、できないことや弱いところを見極めるだけでなく、「得意とすること」や「興味も示すもの」に注目することなど、が重視される。また、働きかける方法を一定にしたり、同じ場所を多目的に使わず同じ目的に使うなどして空間を「構造化」し、「分かりやすい環境」を整えることで「自立できるように支援する」のである。

このような考え方を、保育園のみならず、小学校

という場面においても必要に応じて活用してもらうことで、具体的に効果があつたのか、効果があつた場合、その理由は何か、などを検討することで、今後も増加すると予想される広汎性発達障害の児童、特に高機能自閉症の児童の教育をすすめる上で参考となることを願うものである。

#### I 目的

前論文において、今後の課題は「３年間にわたる保育園での援助の成果が、小学校という新たな課題を含む授業場面でどのように活かされていくのか、また障害特性に関連した本児のもつ課題がどのように克服されていくのか、そして本児が小学校という新しい環境にどのように慣れていき、どこまで適応していけるのか」などであると述べたが、それを検証することを目的とした。

#### II 方法

今回の研究でも、事例の経過を担当に可能な限り客観的に記述してもらい、その資料を分析しつつ、担任にも助言した。その上で必要に応じて本児を直接観察し、かつ関わりも持つ中で、本児の成長過程、課題の克服状況を追跡し、成長を促す要因は何であるのかを検証していくという方法を取る。

### Ⅲ 事例の概要

対象児童：I. R. 君（T小学校3年生）

主訴：（保育園より）3歳で保育園年少組に入園。保育園での保育が本児にとって適切なものかどうか、助言してほしい  
[保護者からも後日、専門機関より助言を受けることについて了解を得ている]

家族：両親、母の妹（叔母）、母方祖父母、祖父方曾祖母、本児の姉2人の9人家族

生育歴：出産は正常分娩で体重は約3300g。首のすわりは3か月、お座りは6か月、歩き始めは12か月であった。6か月乳児健診、1歳半健診とも異状なしということであった。ただし3歳児健診では、言葉の遅れ、耳の聞こえについて指導があった。母も、姉2人よりも発達が遅れているようで、落ち着きもないと感じている

診断歴：年長組になった年の1月に、医療の専門機関において児童精神科医より、「広汎性発達障害」という医学的診断を受けている

### Ⅳ 小学校入学後の本児の経過観察及び指導の状況

{第1回目} 200X年10月（R君1年生）

T福祉センター会議室にて、担任U先生に面接し、状況報告を受けた上で助言指導した。

（200X年8月末[R君（小1）]までの状況）

[担任からの情報]

◇入学後の本児の状況

- ・環境が変わって不安なのか、入学直後は泣くことがあった。また、嫌なこと、都合が悪いことがあると、「かゆい」「頭が痛い」などと訴える。自分が頼れる存在を探している感じがある。抱かれると安心するようだ。
- ・学校の生活リズムが分かってくるにつれて落ち着いてきている。

◇入学時における本児への担任としての配慮

- ・保育園での指導の状況を聞き、指導の参考とした。
- （例）スケジュール表を必要に応じて活用する。  
パニックが起きた時は本人が落ち着ける環境を作り、一対一の対応に心掛ける。

◇学校での本児の具体的状況

- ・1年生には特殊学級もあるが、本児は普通学級で活動している。

（学習）

- ・国語－ひらがなは書ける。
- ・算数－足し算はできる。
- ・図工－指示されたものと違うものを描く。好きなものを描く。
- ・体育－気が乗らないとやらない。ルールが分からない。集団行動は不得手。体育館に入ることをいやがることもある。
- ・音楽－音楽に合わせて踊る場面では、入学直後は逃げ出したが、今は慣れてきた。
- ・生活－変化が分からない（朝顔の観察で前と変わったところに気がつかない）。
- ・その他－質問すると答えが分かっているなくても手をあげる。指されることがうれしい様子。指されると答えるが、答えが間違っている。1時間座っておられる。〇がもらえるととても喜んで、もう一人の担任（特殊学級担当）に見せに行く。

（給食）

- ・配膳されたものが、食べられるかどうか分からない。「食べられないようなら最初に減らす」ということが分からない。「すき？きらい？」と聞いても返事がない。

（掃除）

- ・高学年の子と縦割り班清掃をしている。清掃場所の鍵の係で「〇〇室の鍵を取りに来ました」「〇〇室の鍵を置きに来ました」と決められたようにいう。

（登下校）

- ・入学当初は、「〇〇さんと手をつながなければいや」といって泣いた。その後は、誰とでもよくなった。特に心配することもなく、集団登下校している。

（着脱）

- ・特に問題ない。タグに触ることにこだわりがある。水着や水泳帽などは裏返しに身につけたりする。

（運動・遊び）

- ・放課はうさぎを見に行く。水遊びが好き。友達と遊んでいるところは見たことないが、ひとりぼっちでいるという印象もない。

（人との関わり）

- ・人のことばがけには反応する。しかし、返事が合っているかどうか分からない。
- ・視線が合わないことはないが、ずっとは見えてもらえない。視線は、「こっち見て」というところらへを向き、視線も合うことがあるが、ずっとは見えてもらえない。
- ・本人から話かけてはくる。

・担任が何度も言えば、納得し、従うことができる。  
(ことば)

・自分の気持ちはしゃべる。たたかれて、痛いといって泣くが、なぜ痛くなったかがいえない。

(こだわり・くせ)

・信号へのこだわりは、交通安全の誓い、チョコケーキへと変化してきている。

・指しゃぶり、タグへのこだわりは変わらない。

・一度覚えると変えない。フッ素洗口時、手を顔の周りに持っていく。

・いやなことがあると「かゆい」「痛い」という。

(その他)

・決められたことは、よく覚えているので担任も助かることもある。例えばチャイムが鳴ったら席に着くこと、チャイムが鳴ったら放課になること、鍵を返すこと、日直の仕事など。

(変化)

・パニックや独り言でぶつぶついうこと、などが減ってきている。

・学校生活に慣れてくるにつれて、「とても困る子」との思いは薄れてきている。学習にも楽しそうに参加する。

[担任として本児のため配慮した点]

(1) こだわり(信号、チャイムなど)、指しゃぶり、タグを触ることなどはやめさせない(理由:本人が落ち着けるため)。

(2) 一日の予定を伝え、変更があった場合は本人が納得するまで説明するようにしている。予定変更の時は、変更内容を何回も本人に言う。本人が「うん、わかった」というまで、近くでいう。その後、本当にわかっているか確認のため「〇〇は何時間目?」と聞くと、「〇時間目」と答えるので、本人が正しく理解しているかどうか確認できる。

◇担任からみた本児の今後の課題

(1) 友たちとの関わりについて、どのような対応をしていくのがよいか。

(2) 指しゃぶり、タグ触りは、ずっと続くものかどうか。続けさせてよいものか、注意した方がよいのか。

(3) 集団生活の中で、本人だけに何度も繰り返して言ったり注意したりしているが、今後学年が上がるにつれて、他の児童がどうして本人に対してだけ特別な対応するのかと思うのではないか。親は「周りには自閉症ということを知らせないでほしい」と考えている。

(4) 親は本児が「自閉症」であるといっているが、担任に「この子は どうして いうことを聞かないのか、わがままではないか。」ということがあり、本当に理解しているのか気になる。

◇担任への助言

(1) 無理に関わらせるよりも、本人が関心をもっている遊びや活動をする時に、他の児童にも参加するよう声かけをしてみたり、他の児童に誘いの言葉をかけてもらう程度でよいのではないか。

(2) これも無理にやめさせようとするれば、他のものに移っていくことが多いと思われるので、本児が関心を持ちそうな活動を提供したり、気をつけるように声をかける程度にしておき、成長を待つことがよいのではないか。

(3) 親との話し合いで、了解してもらえる範囲での説明を他の児童にもすることが原則と思われる。

(4) 親としての気持ちも理解して、時間をかけて共通理解を図る努力をする。

{第2回目} 200X+1年 3月 (R君1年生)

T小学校を、A学園コーディネーターとともに訪問。本児の在籍する1年1組(23人)の授業を観察。担任から状況報告を受ける。

◇本児の1年生3学期における学校での具体的状況(学習)

・国語—漢字の読み書きはよくできる。登場人物の気持ちや情景など、読み取りは苦手。物語の内容理解は不得意で、とんちんかんなことをいうことがある。漢字は得意だが、はねたりするところの指導が必要。

・算数—足し算、引き算ともに得意。

・図工—指示された内容に沿ったものは描ける。

・体育—集団行動(集合、整列など)は、周囲に迷惑がかからない程度にできる。

・音楽—大きな声で歌を歌うことができる。鍵盤ハーモニカでは、自分の速さでなら演奏することができる。

・生活—たこあげを喜んでおこなう。糸が結べないなど、困ったことがあると、教師や友達に「できない」といって意思表示をする。

・その他—教師を呼び、「見て見て」ということが多くなった。授業中など、何をしてよいかわからないときには、さりげなく隣の子をみる。目が合うことが多くなった。

(給食)

- ・当番の仕事はできる。よそわれた分量を残さず食べる。

(掃除)

- ・上級生の言うことを、素直に聞いて掃除に取り組むことができる。

(登下校)

- ・特に問題ない。月曜日にぐずることはなくなった。

(着脱)

- ・タグに触ることにこだわりがある。指しゃぶりもあるが、言えばやめる。

脱いだ服は注意を促せば何とかたためる。

(運動・遊び)

- ・放課は飼育舎に行く。単縄跳びをする(跳んだ数を数えてもらいたがる。担任が屋外にいないときは、別の教師に頼む)縄跳びも初めは1回も出来なかったが、今は30回は出来る。飛び上がり、くぐりぬけなどを同時にすることが、わからない様子(「～しながら～する」ことが困難)。

(人との関わり)

- ・注意を促さなくても、視線が合うことが多くなって、時間も長くなった。
- ・他の児童との関係では、2～3回は働きかけないと対応出来ない。
- ・相手を見分けることは得意で、わがままを言うてよい先生と、言うことを聞かなければいけない先生とを区別をしている

◇成長してきたと思われる点

(予定の変更)

- ・チャイムが鳴った時でも、これが終わらないとだめと言えは、従えるようになった。

(困ると「かゆい」というくせ)

- ・3学期は、1回だけあった(「いいかげんさ」が出てきたと思われる)。

(パニックについて)

- ・3学期は、一度もない。

(泣くことについて)

- ・2学期には1回あったが、3学期はない。

◇担任からみた本児の課題

- (1) 運動などで、二つの連続動作をすることができない。

- (2) 物語の内容理解が苦手なように、相手の心を読む、意味を正確に理解することが難しい。

{第3回目} 200X+1年7月(R君2年生)

T小学校を訪問し、N校長と話をした後、本児の

在籍する2年生の授業を観察。

〔校長との情報交換〕 先日、校長室から見える「綱ネットのぼり」をやりに本児がやってきて、校長に見ていてほしいというので、部屋から見ていると上手に登った。上まで行くと、またネットを上手に下り、見ていて何も心配する状況はなかった。障害があるという話を聞いていなければ、ごく普通の児童の言動という印象を受けたとのことであった。

〔担任からの情報〕

資料(省略)と共に、口頭で以下のような説明があった。

◇本児の課題

- 1) くせ(上着のタグをいじる、指しゃぶりをする)

- ・学年が上がった時に、他児から何か言われたりするのはと心配している。
- ・授業中など考える時間や話を聞いている時間に自分の世界に入っていることが見られる。このような場合でも、名前を呼べばやめるし、流れが変わればやめる、また自分で自然にやめる場合もある。放課中はみられない。

- 2) こだわり

- ・買い物指導のために学校の外へでかけたとき、券売機でキップを購入したが、練習でやったやり方にこだわり、付き添い教員からその場で指示されたやり方に変更できなかった。バスを降りる時に運賃を支払うのだが、お金を一枚一枚入れているため時間がかかった。付き添いの教員に、一度に入れるようにと言われても、その切り替えはできなかった。障害を持った児童ということを考慮すれば、やむを得ない部分ともいえるが、社会生活への一層の適応力を養うという意味では、今後の課題といえる。

◇本児の変化した点

- 1) 授業で分からない場合

- ・これまで、「先生、先生」といって担任に援助を求めていたが、それをわざと聞かないようにしていたところ、友達に聞いたりするようになった。それが、テストの時にもあらわれ、隣の子の答案を見たりすることもあった。注意すれば分かる。

- 2) 大きな音が聞こえた場合

- ・以前のように、泣いたり騒ぐこともなくなった。

- 3) 予告のない場合

- ・予告をしなくても、時間割や予定の変更をすんなり受け入れられるようになった。



#### ◇教室における本児の行動観察

給食中を含め、T（筆者）が観察している時間帯において、担任が気にしていた癖は出なかった。話しかけに対する反応、応答も良好で、気になる点はない（しいていえば感情表出がやや平板といった点ぐらいである）。一度、担任ではない先生から、「T先生の目を見て話をしなさい」と指示をされ、目を見て話をするという場面があった程度である。

給食は児童の好きなカレーライス、サラダ、牛乳、メロンであったが、時間的にも他の児童とあまり差もなく、又きれいに食べていた。途中、Tがカレーをご飯にかけず、別々に食べている場面を見て、「カレーをかけないの」と尋ねてきたりして、周りの様子も観察もしていることがわかった。片付けの時には、その手順をTに対して、一つ一つ丁寧に教えてくれた。

#### ◇担任への助言等

本児の成長ぶりを今回も確認できたことを伝えた上で、これは担任の適切な環境構成、信頼関係に基づいた適切な働きかけ、さらに学校全体で児童を見守るという支援体制等によるものと高く評価していることを伝えた。

本児の癖についても、あくまで限定的のもので、学校生活をする上で困るほどのものではないため、急いでやめさせようとするのではなく、担任のいうように、指しゃぶり等の代わりになる対象を見つけしていく姿勢でよいのではないかと助言した。

{第4回目} 200X+1年12月（R君2年生）

T福祉センター会議室にて担任U先生と面接し、本児の状況について報告を受けるとともに、助言をした。

[本児の状況について（担任の映したビデオと報告より）]

#### ◇教室および校外での活動場面

ビデオに映った教室内での場面で、一番印象的であったのは、本児の笑顔であった。とても表情が豊かであり、同時に自然で、いかにも子どもらしいという印象を受けた。ビデオに校外活動として海岸で遊ぶ本児の様子が映っていたが、波と楽しそうに戯れる姿が見られた。他の児童と関わる場面は見られなかったが、他の児童も波と遊ぶことに夢中であり、この年齢の児童のごく自然は姿である、と担任よりコメントがあった。

#### ◇授業場面

算数の授業では計算において平均点は80点あり、

普通の水準とのことであった。ただし計算の速さではクラスで一番のことでもあるという。一方で、文章題を不得意とするところも見られる。感情表出においては、うれしすぎて落ち着かなくなったり、感情が高ぶったりすることがある。集団適応面においては、周りの児童が優しいこともあり、問題はなく、むしろ本児はユニークな存在として人気があるという。

11月20日の本人の絵日記を見ると、「今日一、二時間目におこのみやきを作りました。一・六ぱんがS先生、二・四N先生、三・五はんが、U先生でおこのみやきを作りました。」と書かれていた。

◇癖について一指しゃぶり等はまだ見られるが、注意すればすぐにやめる。

#### ◇担任への助言

##### 1) 癖について

・年齢があがるにつれて他の児童から、からかわれる可能性もあるので、道徳の授業などを活用し日常的に啓蒙的な働きかけを全児童にしておくことも大切である。

##### 2) 自発的判断力について

・1)に加え、本児の常識についての意識を高めることも大切と思われるため、本児とよく話合った上で、「注意カード」などを持ってもらい、それを自分で見ることで担任から注意を受けなくても、癖については自発的に対応出来る能力を高める工夫なども検討してほしい、と伝えた。

{第5回目} 200X+2年3月（R君2年生）

T小学校にて本児の授業（運動場での集団遊び）を観察後、担任U先生と面接し、本児の状況について報告を受けた。集団遊びにおいては、全く気にならないような行動はみられなかった。

・担任からの報告の中で最も大きな変化は「指しゃぶり」がなくなったことであった（髪の毛をいじることはあるという）。前回{12月}の助言に基づいて、本児と約束をした上で、筆箱の内蓋に約束事項を貼ってもよいと尋ねたところ、よいというので、「約束 1指しゃぶりをしません、2お腹をしまいます」と貼っておいたとのこと。その後、すぐに変化した訳ではないが、指しゃぶりをした時に、「約束は」といえばすぐにやめた。3月には、ほとんど注意する必要もなくなり、自然に見られなくなっていった。

{第6回目} 200X+2年6月(R君3年生)

T福祉センター会議室にて今年度本児の担任となったI先生と面接し、本児の状況について報告を受けるとともに、助言をした。

- ・現在のクラスは21人で、本児はその中の1人である。
- ・本児の興味がある内容であれば特に心配する必要はない。「どう考えるのか」ということになると、答えるのも難しいようである。
- ・手を上げて発言したい方である。10回中正しく答えられるのは半分ぐらいである。間違えたときは、フォローを入れるようにしている。
- ・校長先生からは、交通指導のために警察の人が来たが、雨で室内での指導となり交通標識について質問が出ると、本児が手を上げ、3回とも正解を出していたので驚いたとの報告があった。やはり関心のある分野のことだと、本児の特性が活かされるようである。
- ・こだわりが、「時間のことを気にする」ということに表れると、何度も時間のことを尋ねるので、他の児童が「うるさい」ということはある。
- ・「〇〇先生、おはようございます」などあいさつはしっかりとでき本児の素直な良い点と考えている。
- ・放課などに、職員室に来て、担任のひざの上で、絵本を読んだりすることもある。

#### ◇担任への助言

- 1) できるだけ「普通の対応」をしてみる(今のところスケジュール表がなくとも言葉での働きかけで通じるとのことであるので、特別な配慮は少なくしてみる)。
- 2) 本児が理解してもらえないと感じて起こりうる二次的障害への配慮をする。必要に応じてフォローを入れてもらうことが大切である。
- 3) 本児のこだわりについて、必要があれば、保護者の了解を得た上で、他の児童にわかりやすく説明する。
- 4) 担任のひざの上で絵本を読むというのは、本児の最大の弱点である対人関係において愛着および信頼関係の形成につながる行為であると考えて基本的には受け入れるが、時には、隣の席に座って読ませてみるなど、ある程度変化を持たせることも検討してみる。

#### V 考察とまとめ

小学校という新しい環境に置かれ、本児は当然の

こといろいろな不安を感じたと推測できる。

本児の場合、ひとつ恵まれた点として、クラスの児童が保育園からの持ち上がりであったことがあげられる。しかし学校での生活は多くの点で保育園時代とは異なり、その意味では学級担任がどのように本児を理解し、関わるかが大きな鍵を握っていた。

1年生の担任は、まず保育園からの情報も参考にしながら、次の二点について特に配慮している。

- 1) こだわり(信号、チャイムなど)、指しゃぶり、タグに触ることなどはやめさせない(理由:本人が落ち着けるため)。
- 2) 一日の予定を伝え、変更があった場合は本人が納得するまで説明するようにしている。

予定変更の時は、変更内容を何回も本人に言う。本人が「うん、わかった」というまで、近くでいう。その後、本当にわかっているか確認のため「〇〇は何時間目?」と聞くと

「〇〇時間目」と答えるので、本人が正しく理解しているかどうか確認できる。

結果的には、パニックや泣くことは3学期にはなく、学校生活にも慣れ、適応能力が高まったと考えられた。

対人関係面では、困ったことがあると教師や友達に「できない」といって意思表示をしたり、教師を呼び、「見て見て」ということが増え、また注意をしなくても、目が合うことが多くなっており、明らかにこの面でも成長が認められる。しかし、関心の薄い事柄については、なおタイミングよく、適切に働きかけることが必要であった。例えば、脱いだ服をたたむ時は、注意を促すことでその行為が可能となり、他の児童と行動をともにする時には、2~3回働きかけることで対応出来る状態になるため、「適切な働きかけ」がなお重要であることが確認できた。

予定の変更については、例えばチャイムが鳴った時、「この課題が終わらないとだめ」と言えは、従えるようになっており、「見通しをつける力」も着実につけてきている。こだわりの面では、タグに触ることへのこだわり、指しゃぶりはあるが、言えばやめることができる状況にあり、この面での「柔軟性」「適応性」も高まっていった。

以上のように、本児の成長は明らかであるが、担任からみた本児の課題にもあるように、複雑な行動を適切におこなうことや、相手のこころを読み取り、意味するところを正確に理解することには困難もあつ

た。今後も本児に適切な働きかけをしながら、様々な経験を積ませることで、本児を支援していくことが必要といえる。

ここで入学からの1年間において、本児の成長を促す要因として考えられたものを整理しておきたい。

特に、保育園とは異なった、小学校という新しい環境に置かれた高機能自閉症の児童に対する適切な対応と思われるものを以下のようにまとめておく。

1) 分かりやすい環境作りと個別対応をしたこと。  
具体的には：

2) スケジュール表を活用したこと。

- ・保育園での指導を参考にして、本児が「見通し」を持て安心できるようにスケジュール表を活用している点が評価できる。

3) 一日の予定を伝え、変更があった場合は本児が納得するまで説明し、かつ本児が理解したかを確認したこと。

4) 本児の自発的行動を出来るだけ尊重したこと。

- ・質問すると答えが分かっているなくても手をあげ、指されることがうれしい様子であるため、答えが正しいか間違っているかは当面問題とせず、本児の自発性を大切にしている点が自閉性障害のある児童に対する対応として評価できる。さらに〇がもらえると、とても喜んでもう一人の担任（特殊学級担当）に見せにいくという行動も、同じ理由で意味があるといえる。

5) 本児のくせやこだわりをやめさせなかったこと。

- ・本児が落ち着けるようであれば、（信号、チャイムなどへの）こだわり、指しゃぶりやタグを触ることなどについて「無理にやめさせない」ようにしたことは、本児の障害特性を考えれば、当面適切な対応と考えられる。

以上のように、本児をよく観察し、次のような気づきがあったことが、大切といえる。

本児が頼れる存在を探していると感じたこと、抱かれると安心すること、学校の生活リズムが分かるにつれて落ち着いてくること、などを参考にして、「スケジュール表を活用したこと」、「一日の予定を伝え、変更があった場合は本人が納得するまで説明するようにし、その後、本当にわかっているか確認したこと」、「本児の自発的行動を出来るだけ尊重したこと」、「こだわり（信号、チャイムなど）、指しゃぶり、タグを触ることなどはやめさせなかったこと」など、学校場面において「落ち着ける環境作り」と「一対一の対応」に心がけたことが、きわめて適切

であったと考えられる。

次に、同じ担任の指導のもとにおける2年生の本児の状況についてみる。

変化した点として

1) 授業で分からない場合、これまでは、「先生、先生」といって担任に援助を求めていたが、それをわざと聞かないようにしていたところ、友達に聞いたりするようになった。

2) 大きな音が聞こえた場合、以前のように、泣いたり、騒ぐこともなくなった。

3) 予告のない場合、予告をしなくても、時間割や予定の変更をすんなり受け入れられるようになった。

などが担任から報告された。

このように、担任の自然で、無理のない働きかけや、信頼関係に基づいた関係の中で、本児の求めるままに動くのではなく、少し高度な課題を与えて、本児が柔軟で適応的な対応が取れるように工夫していること、余計に手をかけないことなども、本児の成長を促進する上で大きな影響を与えていることが明らかになった。

具体的には、対人関係面で、授業で分からない場合、これまで「先生、先生」といって担任に援助を求めていたが、担任がそれをわざと聞かないふりをすることで、友だちに聞いたりするようになった。すなわち、関わる相手が大人から児童にも広がっていったのは、この面での大きな成長といえる。また、パニックを起こす原因となった大きな音が聞こえた場合でも、以前のように泣いたり、騒ぐこともなくなって、「見通しを立てられる力」がついてきたと解釈できる。これは、予告をしなくても、時間割や予定の変更をすんなり受け入れられるようになったという事実にも端的にあらわれている。その一方で上着のタグをいじる、指しゃぶりをするというくせやこだわり、あるいは切り替えができないという点が課題であるという報告を受けたため、担任に対して以下のような助言をした。

1) 担任が心配している、年齢があがるにつれて他の児童からからかわれる可能性については、道徳の授業などを活用し、日常的に啓蒙的な働きかけを全児童にしておくことも大切である。

2) 本児自身が常識についての意識を高められるように工夫してみる。具体的には、1)に加えて、本児とも話し合い、「注意カード」などを持ってもらい、それを自分で見ることで、



担任から注意を受けなくても、癖などについて自発的により適応的な対応が出来るような環境作りをしてみる。

その後、2年生の3学期に確認したところ、指しゃぶりがなくなったという（髪の毛をいじることはある）。筆者の助言に基づいて、本児と約束をした上で、筆箱の内蓋に約束事項を貼ってもよいか尋ねたところ、よいというので、「約束 1 指しゃぶりをしません、2 お腹をしまします」と貼っておいた。その後、すぐに変化した訳ではないが、指しゃぶりをした時に、「約束は」といえばすぐにやめた。3月には、ほとんど注意する必要もなくなり、自然に見られなくなっていった。

担任の1年生から約2年間にわたる継続的指導の中での効果的な関わり、工夫により、本児の成長が安定的に支えられてきたが、さらに筆者との相談に基づき、担任が視覚的な方法で本児の自覚に訴える対応をしたこと（筆箱の内蓋に、約束の内容を貼っておくこと）で、徐々に指しゃぶりも見られなくなったことは、「分かりやすい環境の大切さ」と「本児の成長ぶり」を証明するものであった。

そして3年生になった本児にとって、2年間慣れ親しんだ先生から、新しい担任、教室などへの変更は大きな環境の変化といえる。今回の担任からの報告でも、指しゃぶりは見られなかった。また担任の配慮もあり、環境の変化の影響がマイナスに出ているという状況も余り見られず、本児の（障害）特性が多少感じられる場面が見られるという程度（例：時刻を何度も尋ねる）であった。このことは本児の「見通しを立てられる能力」が着実についてきている証拠であり、本児の成長ぶりを裏付けるものであると考えられる。

以上のように、担任の継続的で適切な対応により、小学校においても本児の成長が確認できた。今後は、担任にできるだけ「普通の対応」をしてもらいながら、本児の課題であるこだわりや他の児童との対人関係における対応能力において、より一層の成長が認められることを望みたい。

この論文を2006年度全国保育士養成セミナー・研究大会の席で発表したところ、安城学泉短期大学の角田氏より、次のような質問をいただいた。

（1）指しゃぶりがなくなることが本当に成長といえるのか（2）指しゃぶりがなくなる前に担任と本児との関係において何か意味のあるやりとりがあったのではないかと、という趣旨のものであった。

それに対して、筆者から（1）指しゃぶりという

一つの症状が消失したことのみをもって成長したととらえているのではなく、本児の全体像における成長ぶり、例えば、笑顔が多くなった、人との関わりを自然に求めるようになった、など対人関係面における成長ぶりを前提とした上で症状が消えていることが大切と考えていること、（2）職員室へ入ってきた時など、担任の膝の上などに乗ってくることがあるが、本児のこれまでの経過を考慮して担任がそれを受け入れる対応をしていること、を伝えた。

こうしてみると角田氏の指摘はまことに要を得ており、「本児の成長」を考える上で欠くことのできない視点（症状の消失や成長には欠くことのできないスキンシップなどの人間的関わりについての視点）であるといえる。角田氏の貴重な指摘に感謝したい。

最後になったが、この研究を継続するに際して快く協力をいただいたT小学校のN校長先生、1年生と2年生を担当されたU先生、3年生担任のI先生にはここからお礼を申し上げたい。

#### 【参考・引用文献】

- 1) 服部次郎：高機能自閉症と思われる事例への援助—保育園におけるTEACCHの活用—、岡崎女子短期大学研究紀要第38号、2004